

ケニアにおける農業開発・食料消費の 現状と課題

伊藤 紀子

(拓殖大学 准教授 ・ 農林水産政策研究所 客員研究員)



報告の内容

1. 研究の背景・目的
 2. ケニアの農業開発・食料消費の概要
 3. ケニア調査の概要
 4. 調査結果
 - (1) 男女別の食意識
 - (2) 男女別の食品摂取
 - (3) 世代別の食品摂取
 5. まとめ：日本の国際協力への示唆
- 参考文献

1. 研究の背景・目的

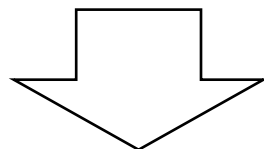
・アフリカの都市化・食の簡便化・コストの高さ・コメ消費の増加への注目

グローバルな食品流通(安価な輸入食品増),主食(特にコメ)増産重視(伊藤2023, 丸山2023など)

・消費者の多様な食意識,性別や世代に注目した消費の特徴は明らかでない

ケニア農村女性:「健康」や伝統的料理に関心高い,多様な食品摂取重視(伊藤2022; 伊藤・丸山 2025)

都市の子ども:栄養知識を持ってもジャンクフードなど「不健康な食品」摂取 (Kigaru et al. 2015)



本研究の目的:

ケニア全国の調査結果を用いながら,「食への多様な意識」,「健康・不健康な食」に注目し,食品摂取の現状を性別・世代別に把握。

農業・消費の改善に向けて必要な取組(日本の国際協力)を考察する

上の写真はケニア農村の伝統的な豆・トウモロコシの料理,下は近年広まっているコメの料理(報告者撮影)。

2. ケニアの農業開発・食料消費の概要

・ケニアの農業・食料問題と対策

SDGsの取組→アフリカの飢餓撲滅への国際的関心が増加.

SRA (Strategy for Revitalizing Agriculture): **食料不足対策強化**

配給・給食・穀物備蓄, トウモロコシ価格の安定化・貿易管理など

→2010年代～農業成長, トウモロコシ・コムギ・コメ増産

・日本の国際協力

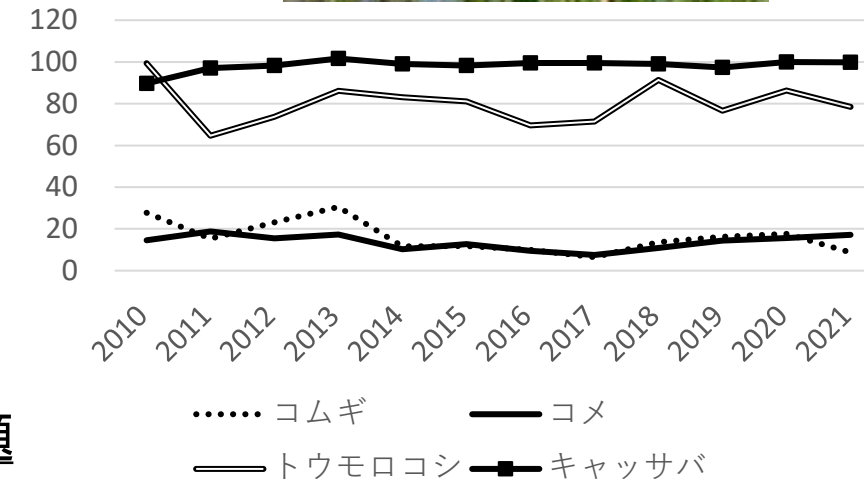
CARD・CARDフェーズ2などのコメ増産政策がメインとなってきた*

⇔(第1図)コメやコムギの自給率は低く

トウモロコシ・キャッサバの自給率は高い.

→トウモロコシ・キャッサバの生産はアフリカの自然環境に適合的

現地の環境や消費者ニーズに合った多様な食の生産・消費の推進が課題



第1図 ケニアの主な作物の自給率 (%)

資料：伊藤（2024）図表2-20の一部転載。

写真はケニア稲作地帯。報告者撮影。

3. ケニア調査の概要

- ・有効回答者215人
(ナイロビ, モンバサなど都市部居住者が多い)
- ・男女はほぼ同数
- ・若年世代(20代, 30代)が多い
- ・調査項目は他国と共通(オンライン調査・詳細は丸山氏報告により説明)

「健康的な食」と「不健康な食」への注目

食に対する意識・食品摂取状況(男女別・世代別)を食品群別摂取頻度や食の多様性の指標で把握

第1表 調査回答者の性別・年代の分布

年齢	男性	女性	合計
20-29歳	42	38	80
30-39歳	28	27	55
40-49歳	22	20	42
50-59歳	14	11	25
60-69歳	6	7	13
合計	112	103	215

資料：アンケート調査結果に基づき筆者作成。

4. 調査結果

(1) 男女別の食意識

- ・男女共通: 安全性と栄養を相対的重視(1・2位)。伝統性・公平性を軽視(9位～11位)
- ・相違点: 男性は食味(4位)よりも価格(3位)重視。女性**は価格(5位)より食味(3位)重視**

第2表 食品に対する消費者の意識 (男女別)

男女とも、食の「安全性」や「栄養」を、「価格」や「利便性」よりも重視

男性回答者(N=112)					女性回答者(N=103)				
順位	属性	重視	軽視	差分	順位	属性	重視	軽視	差分
1	安全性(食品を摂取しても病気にならない程度)	331	10	321	1	安全性	320	11	309
2	栄養(脂肪, タンパク質, ビタミンなどの量と種類)	325	8	317	2	栄養	297	15	282
3	価格(食品に支払われる価格)	164	108	56	3	食味	121	42	79
4	食味(その食品を食べることがどの程度五感に訴えるものであるか)	110	63	47	4	ナチュラル	103	62	41
5	ナチュラル(食品が近代的な技術に頼らずに生産されている度合い)	108	65	43	5	価格	127	104	23
6	環境影響(食品生産が環境に与える影響)	53	93	-40	6	環境影響	54	70	-16
7	利便性(食品の調理や消費のしやすさ)	41	125	-84	7	利便性	35	107	-72
8	原産地(農産物の生産地)	35	157	-122	8	外観	19	153	-134
9	伝統性(伝統的な消費パターンを守る)	28	192	-164	9	原産地	22	175	-153
10	公平性(食品の生産に関わるすべての関係者が等しく利益を得る度合い)	19	199	-180	10	公平性	19	182	-163
11	外観(食品が魅力的に見える程度)	18	212	-194	11	伝統性	16	212	-196

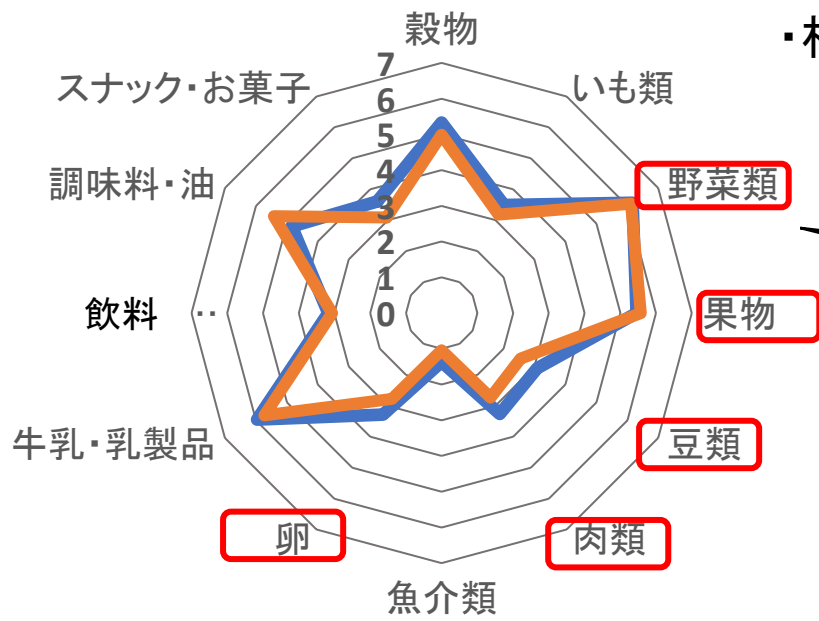
資料：アンケート調査結果に基づき筆者作成。



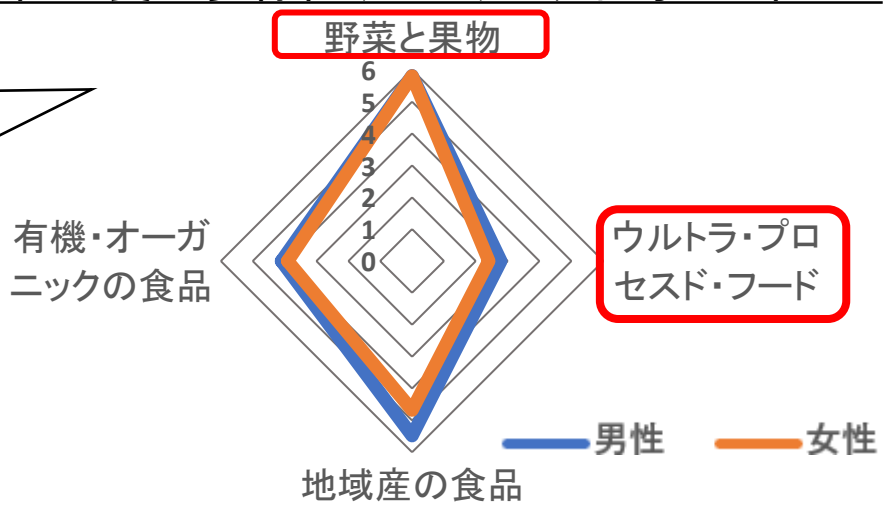
4. 調査結果

(2) 男女別の食品摂取(1週間あたりの摂取日数:0日～7日。食品群(左)・食品グループ別(右)の摂取頻度をグラフ化)

- ・男女共通:穀物・野菜類・果物・牛乳・乳製品,野菜と果物・地域産食品を頻繁に摂取
イモ類・豆類・肉類・魚介類・卵, ウルトラ・プロセスド・フードの摂取頻度が少ない
- ・相違点:女性は男性より豆類・肉類・卵(タンパク質を含む食品群)の摂取頻度少ない
女性は男性より地域産の食品・ウルトラ・プロセスド・フードの摂取頻度少ない
女性の食の多様性(3.990)は, 男性の食の多様性(4.018)より平均的に低い*



男女とも「健康的な食事」とされる野菜・果物を,「不健康な食事」とされるスナックやウルトラ・プロセスド・フードより頻繁に摂取。
タンパク質を含む食品摂取状況に男女差。



第2図 1週間当たりの食品群別摂取頻度 資料：調査結果より筆者作成。
*食の多様性＝多様性得点（1週間に6日～7日摂取した食品群数で計算）



4. 調査結果

(3) 世代別の食品摂取(1週間あたりの摂取日数:0日～7日)

第3表 1週間当たりの食品群別摂取頻度の世代別の分布（各世代の摂取頻度の分布を縦に合計すると100%）

	20代	30代	40代	50代	60代
野菜と果物	80	55	42	25	13
毎日	65	60	57	52	54
週に6日	4	9	12	8	8
週に5日	13	13	14	8	8
週に4日	6	-	5	12	8
週に3日	8	7	7	8	15
週に2日	1	9	2	8	-
週に1日	4	2	2	4	8
全く食べない	-	-	-	-	-
地域産の食品	80	55	42	25	13
毎日	44	40	48	44	62
週に6日	8	6	12	8	8
週に5日	11	9	12	16	23
週に4日	8	13	12	12	-
週に3日	13	13	7	8	-
週に2日	9	6	2	4	-
週に1日	9	11	7	8	-
全く食べない	-	4	-	-	8
「健康的な食」とされる野菜・果物など					

	20代	30代	40代	50代	60代
有機・オーガニックの食品	80	55	42	25	13
毎日	75	66	67	52	62
週に6日	5	7	7	12	23
週に5日	6	9	17	16	-
週に4日	9	4	-	12	8
週に3日	3	6	10	8	-
週に2日	3	7	-	-	-
週に1日	-	2	-	-	8
全く食べない	-	-	-	-	-
果物	80	55	42	25	13
毎日	66	46	36	56	23
週に6日	5	13	17	-	8
週に5日	10	15	12	8	15
週に4日	8	13	7	20	23
週に3日	8	6	10	8	8
週に2日	3	7	7	4	15
週に1日	1	2	12	4	-
全く食べない	-	-	-	-	8
「不健康な食」とされる ウルトラ・プロセスト・フードなど					

	20代	30代	40代	50代	60代
ウルトラ・プロセスト・フード	80	55	42	25	13
毎日	6	4	2	-	-
週に6日	10	-	2	4	-
週に5日	8	13	12	12	-
週に4日	13	16	-	12	23
週に3日	16	22	7	12	-
週に2日	18	15	26	8	-
週に1日	29	29	45	40	62
全く食べない	1	2	5	12	15
スナック・お菓子	80	55	42	25	13
毎日	23	22	17	4	-
週に6日	10	2	5	8	-
週に5日	11	9	14	8	8
週に4日	16	11	10	4	-
週に3日	9	16	10	8	-
週に2日	9	18	10	12	23
週に1日	18	7	26	44	54
全く食べない	5	15	10	12	15
「健康/不健康な食」の摂取状況は 高齢・若年世代とも複合的					

「健康/不健康な食」の摂取状況は
高齢・若年世代とも複合的

- ・ 高齢世代(50代～):
「健康的な食」とされる野菜・果物をよく食べる人が多いが、中にはあまり食べない人もいる。
「地域産」「有機」食品摂取頻度は高い傾向。
「不健康な食」とされるウルトラ・プロセスト・フードをよく食べる人もいる。
スナック・お菓子はあまり頻繁に食べない
- ・ 若年世代(～30代):
「健康的な食」とされる野菜・果物をよく食べる
「不健康な食」とされるウルトラ・プロセスト・フードをあまり食べない人が多い。
スナック・お菓子をよく食べる人が多い

資料：調査結果より筆者作成。表の一部を省略して表示。

注：ウルトラ・プロセスト・フード：ファストフード、ジャンクフード、スナック菓子などの、すぐに食べられるように加工された、油脂がたくさん入っている食品・料理のこと 例：ハンバーガー、ピザ、フライドチキン、インスタント麺、ポテトチップス、クッキー



5. 調査結果のまとめ・日本の国際協力への示唆

- ・調査対象者の特徴: 男女ともに, 食の「安全性」・「栄養」を相対的に重視。「健康的な食」とされる野菜・果物, 地元産食品を, 「不健康な食」とされるスナック・お菓子, ウルトラ・プロセスド・フードより頻繁に摂取。穀物などの摂取頻度が, タンパク質(肉, 卵, 豆類など)の摂取頻度より高い。
- ・男女の違い: 女性は価格より食味重視。男性は食味より価格を重視。
女性の方が男性より, タンパク質摂取頻度や食の多様性が低い傾向。
- ・年代差: 若年世代: スナック・お菓子をよく食べる人が多い。高齢世代: 野菜・果物の摂取頻度が低い人もいる。

日本のアフリカ(ケニアなど)への国際協力への示唆

- (1) 主食増産(食の価格抑制・簡便化)のみならず, 消費者ニーズに沿い, 安全性や栄養に配慮した食品・農産物の生産と流通の発展を支援
穀物のみならずタンパク質を含めた食の供給・食の多様性の確保
- (2) 性別・年代別など各属性グループの意識や状況に合った食品生産・流通の発展を支援
女性に焦点を当てた味の良い食品供給・タンパク質(肉, 卵, 豆類など)摂取推進・食の多様化推進。
男性向けの安価な食品供給。若年世代の頻繁なスナック摂取へ対応。高齢世代の野菜・果物摂取の推進

参考文献

- JICAウェブサイト(CARD関連情報)
<https://www.jica.go.jp/activities/issues/agricul/approach/card.html>
- Kigaru, D., C. et al. (2015)“Nutrition Knowledge, Attitude and Practices among Urban Primary School Children in Nairobi City, Kenya: a KAP Study,”BMC Nutrition 1 (44): 1–8.
- 伊藤紀子(2022)「ケニア稲作農村女性の食に対する意識と食品摂取行為」『アフリカ研究』102:1–12.
- 伊藤紀子(2023)「アフリカ：食料消費の現状と課題」農林水産政策研究所プロ研資料 第2号.
- 丸山優樹(2023)「セネガル：国産米の増産に向けた取組に着目して」農林水産政策研究所プロ研資料 第2号.
- 伊藤紀子・丸山優樹(2025)「ケニア農村女性による食事作りの変化とその要因：伝統食作りの継続に関する質的研究」『フードシステム研究』31(4): 241–246.
- 伊藤紀子(2024)『「食」でつながるアフリカのコミュニティ: 持続可能な地域の発展をかなえるための5つのヒント』筑波書房.

